神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告3:49～52.2005

「知の総合化」をめざす「総合的な学習の時間」カリキュラムの研究

上　島　智　子[1]

「総合的な学習の時間」のねらいの一つは、各教科・科目等における学習の成果を関連づけ、総合化する点にある。そこで「知の総合化」を図るモデルプランを作成し、各教科との関連や教員の指導の在り方、評価方法などを検討した。また、これまでの実践から「総合的な学習の時間」の成果について考察した。

はじめに

平成15年12月の高等学校学習指導要領の一部改正において「総合的な学習の時間」の一層の充実が求められた。特に、「総合的な学習の時間」のねらいとして「各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け，学習や生活において生かし，それらが総合的に働くようにする」という「知の総合化」の視点が明記された。そこで「総合的な学習の時間」を実践することで、この「知の総合化」を図ることが期待できるカリキュラムを開発し、その成果を考察するため、本テーマを設定した。

研究の内容

１「総合的な学習の時間」における「知の総合化」

（１）「知の総合化」の定義

高等学校学習指導要領にあるように「総合的な学習の時間」のねらいの一つは、各教科における学習の成果を関連づけ、総合化する点にある。この総合化とは各教科で学んだ知識や技能、学び方などが「総合的な学習の時間」において、個人の体験と関連づけられ、新たに体系化され、現実的な能力へと変化することを意味している。

（２）各教科・科目との関係

「総合的な学習の時間」と各教科は相互に関連し補完しあう関係にあり、これまでともすれば個々の教科における「知の獲得」にとらわれがちであった学習を総合的な「知の創造」に発展させることができると考えられる。

例えば「ある教科の授業で学習した内容について、『総合的な学習の時間』においてさらに学習を深めていくことによって、新たな『知』の形成を図ることができる。また、各教科の時間では充分に行うことのできない観察・実験・実習、調査・研究、発表などの体験的な学習を行うことができる。」（谷田部　2001）というように、「総合的な学習の時間」は、これまで各教科で身につけてきた知識や技能、資質や能力が、生徒の中で相互に関連づけられ、総合的に働くために有効に機能すると考えられる。

２「知の総合化」をめざすカリキュラム

（１）モデルプランの作成

所属校では、2001年度より「総合的な学習の時間」の実践として「生きる力をはぐくむ課題研究」に取り組んできた。本研究では、この実践をもとに「知の総合化」をめざす「総合的な学習の時間」カリキュラムとして、１年次に35時間の「課題研究」を実施するモデルプラン（第１表）を作成した。

具体的には、「生きる」を統一テーマとして環境、文化歴史、福祉健康、国際理解の４つの分野から各生徒が自分の研究課題を見つけて個人研究を行い、レポートにまとめ、発表するものである。

第１表　　モデルプランの概要（年間指導計画）

期	生徒の学習内容（時数）
前期	各種オリエンテーション（６） 研究課題の考察と決定（３） 情報検索・研究手順の考察（２） 総合講演会（３） 情報分析と個人研究（２） 中間発表の準備（１）
(17)	
後期	中間発表と相互評価　（４） 発表内容の共有（２） レポート作成と発表（口頭による）（５） 発表（スライドによる）の準備と実践（３） 自己評価（１） 全体発表会（２） 評価の確認（１）
(18)	
(35)	合計

1　県立希望ヶ丘高等学校
　研修分野（「総合的な学習の時間」）

（２）モデルプランの詳細

ア　オリエンテーション

このモデルプランでは、①総合オリエンテーション（学習の趣旨やねらいの説明）②テーマ別オリエンテーション（各分野の説明）③情報検索オリエンテーション（図書館利用の方法と情報の種類やその入手方法などの説明）④２年生によるプレゼンテーション（前年度に学習した成果の発表）に、最初の６時間をあてている。このように時間をかけるのは、導入段階におけるガイダンス機能の充実が重要だと考えたからである。これは、教員からだけでなく、司書や既に「総合的な学習の時間」を経験した２年生からの説明を通じて、今後の学習に対する動機づけを目的としている。

イ　課題決定

研究課題の決定は１年間の学習において最も重要なものであり、充分な助言や指導が必要となる。課題を見つけるためのワークシートを用意したり、代表的な研究課題を例示したりするなどの工夫が考えられる。

ウ　総合講演会

外部から講師を招いて講演会を実施する。講演内容は生徒個々の研究課題に直結するものでなくても、講師の貴重な体験や専門的知識が生徒の知的好奇心を刺激する。４月から６月ごろの早い時期に実施すれば、問題意識の喚起や研究課題の発見に有用であり、９月から10月ごろの学習の中盤に実施すれば、学問や研究の意義を再確認し学習を促進する効果が期待できる。

エ　中間発表

中間発表はそれまでの学習成果をまとめ、発表するものである。生徒に「どのようなねらいで、何を調べどんなことがわかったのか」を確認させるとともに、教員が生徒の学習の進度を知り、今後の指導に生かす大切な機会である。

聞き手は発表に対する意見や感想をアドバイスシートに記入する。話し手はこのアドバイスシートにより研究を改善・深化することができる。また、他の生徒の発表を聞くことで、その研究内容や研究方法などを知ることができ、お互いに学びあう「知の共有」が期待できる。さらに、中間発表の内容をWebページで閲覧できるようにすると、異なる分野の発表を知ることができ、より効果的なものになると考えられる。

オ　レポートの作成と発表（口頭による）

レポートは学習を締めくくるものであり、これをもとに口頭による発表会を行う。また、レポートは、研究に利用した資料や提出物とともに個別ファイルにとじ、図書館にコーナーを設けて展示し、次年度の参考資料として利用する。

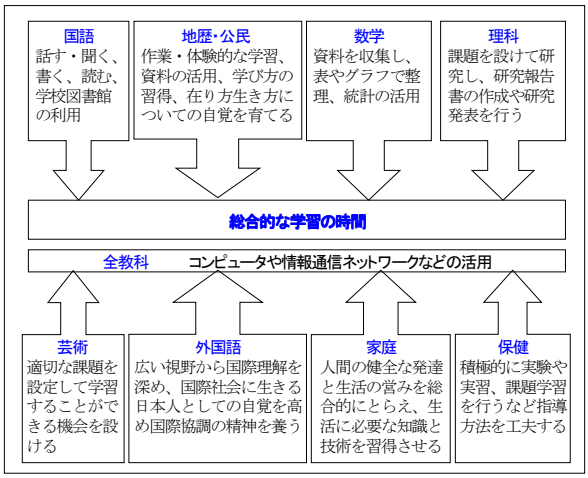
カ　発表（スライドによる）

スライドを使っての発表は、学習の深度とは関係なく多くの生徒が大変意欲的に取り組めるものであり、豊かな表現力を育成できる有意義な体験となる。この後、代表者による全体発表会を実施するが、中間発表・口頭による発表・スライドによる発表を体験してきたことで、レベルの高いものが期待できる。

（３）各教科・科目で指導する内容との関連

ア　各教科・科目との関連

モデルプランでの学習内容は、各教科・科目における目標や指導の内容（高等学校学習指導要領）との関連づけが、第１図のようにできることがわかった。



第１図「総合的な学習の時間」と各教科との関連

イ　教科「情報」との関連

モデルプランのような課題研究型の学習の場合、できるだけ早い時期に正しい情報収集の方法や情報モラルなどを指導する必要がある。ところが「総合的な学習の時間」の中で、情報活用の実践力を高める活動を行うには、設備や時間の面でかなり制約がある。このため教科「情報」と連携することが重要になる。特に効率的な情報検索の方法やプレゼンテーションの方法などについて、教科「情報」での学習の成果が発揮されると考えられる。教科「情報」で習得した知識や技能を活用することによって「総合的な学習の時間」がより高いレベルのものになると考えられる。

（４）教員の役割と指導の在り方

「総合的な学習の時間」に関する教員の役割は各教科とは異なるところがあると思われる。学校あるいは学年全体における「総合的な学習の時間」の運営に関しては、「プランナー」「コーディネーター」としての役割を担うことになる。また担当教員は生徒に対し「アドバイザー」の役割を果たし、適宜、助言や指導を与える必要がある。

また「総合的な学習の時間」では次のような関係で互いに影響しあい学びあうことができると考える。

・教員⇔生徒　・生徒⇔生徒　・教員⇔教員
・外部講師⇔生徒　・外部講師⇔教員

このことから、教員は「総合的な学習の時間」において「教える」だけでなく「助言する」「生徒相互が学びあう」「生徒から学ぶ」などの意識を持つ必要があることがわかる。

（５）評価計画

ア　評価の在り方

高等学校学習指導要領解説総則編によると「総合的な学習の時間」の評価は、次のようにまとめられる。

・数値的評価をしない。
・学習の状況や成果について、生徒の良い点、学習意欲や態度、進歩の状況を踏まえて適切に評価する。

また 「評価の基準、評価方法の工夫改善のための参考資料（高等学校）」によると、

評価に当たっては，各学校において指導の目標や内容に基づいて定められた観点を踏まえて行うことが適当である。

とあり、各学校において指導の目標や内容を踏まえた評価の観点を設ける必要がある。

イ　評価の観点

評価の観点については、高等学校学習指導要領に定められたねらいを踏まえて問題解決能力、思考力、判断力、コミュニケーション能力、技能・表現などを設定している学校が多い。そこで、これらの観点について分析したところ、例えば問題解決能力と思考力や判断力との違いが明確でない、コミュニケーション能力は技能・表現に含まれる内容がほとんどであるなど、それぞれの違いが明確でないものが見られ、各教科の評価の４観点に集約することが可能であるとわかった。そのため「総合的な学習の時間」の評価の観点についても各教科の評価の４観点を基本とすることが適当であると判断した。ただし、各学校が育成したい能力を踏まえ、独自の観点を設定することは当然考えられる。

ウ　評価の方法

高等学校学習指導要領解説総則編によると、「総合的な学習の時間」の評価方法の例について、次のようにまとめることができる。

・レポート、論文、作品などの製作物、発表や討論の様子などから評価する。
・生徒の自己評価や相互評価を活用する。
・活動の状況を教員が観察、評価する。など

⇩

学習に対する意欲や態度、思考力、判断力、表現力、活動の過程で進歩した点などを適切かつ総合的に評価する。

これをもとにモデルプランにおける評価計画を作成した。その際、ある程度の活動のまとまりで評価すべきだと考え年間で３回評価する計画を立てた。①「研究課題申請書」②「中間発表の際の自己評価シートとアドバイスシート」③「レポート提出後の自己評価用紙」を作成し提出する機会をとらえてそれまでの活動を評価し、その後の指導に生かしていくこととした。単にその提出物の成果ではなく、そこまでの研究に対する態度や活動状況を勘案して評価するものである。

３「総合的な学習の時間」の成果と課題

（１）生徒の意識調査

ア　調査の概要

所属校では、「総合的な学習の時間」について、生徒に対してアンケート調査を実施している。ここでは2004年11月の調査結果（１年生272名対象）を利用して「総合的な学習の時間」の成果を考えてみる。これ以降の「　」内の文章は生徒の自由記載の抜粋である。

イ　調査の結果

（ア）「総合的な学習の時間」に興味が持てたか

「『総合的な学習の時間』に興味が持てたか」という問に対して、75.4%の生徒が「興味が持てた」と答え、「全く興味が持てない」1.8%、「あまり興味が持てない」4.4%という結果となった。

各教科に対する興味を調査していないので断言はできないが、各教科の専門性が高くなり、それとともに各自の興味や関心などが分化してきて、科目による好き嫌いがはっきりしてくる高等学校としては、非常に肯定的な回答が多いと判断できる。「総合的な学習の時間」は、ほとんどの生徒が興味を持って取り組めるものであると考えてよいであろう。肯定的な回答の理由として、ほぼ半数の生徒が「自分の好きな、興味のあるテーマだから」と答えている。

（イ）「総合的な学習の時間」から得たものはあるか

「『総合的な学習の時間』から得たものはあるか」という問に対して、56.1%の生徒が「得たものがある」と答えている。その一方、「全く得たものはない」が4.8%、「あまり得たものはない」が8.8%いるが、その理由として「まだ途中なのでこれから得ようとしている」などと答えている。

ウ　調査結果からの考察

（ア）「総合的な学習の時間」から得たものの内容

「総合的な学習の時間」から得たものの内容を分析しキーワードにまとめたものが第２表である。

第２表　「総合的な学習の時間」から得たもの

得たものの内容	数（%）
研究に関する知識、将来に関わる知識、他の人の研究内容、身近な知識	111（40.8）
自主性、積極性、忍耐力、楽しさ努力、面白さ、学問に関する興味	30（11.0）
発表方法、レポートの書き方	29（10.7）
思考力、計画性、まとめる力	15　(5.5)
その他	6　(2.2)
無回答	81（29.8）
合計	272（100）

「総合的な学習の時間」から得たものとして40%以上の生徒が、「新しい知識」「自分が調べているものの内容」など様々な表現で知識を得たと答えており、「総合的な学習の時間」で「知識」を身につけることができたと実感していることがわかる。その中で注目

したいのは「実際に役立つこと」を得たという表現や「これからの人生に生かせる」知識を得たというものである。これらはまさに「総合的な学習の時間」のねらいである、身につけた知識を学習や生活に生かすことや自己の在り方生き方を考えることができたことのあらわれといえよう。次いで、約１割の生徒が「興味のあることを自ら研究していく楽しさ」「自主性・積極性」のような学問に対する意欲や興味を得たと答え、同じく約１割の生徒が、「わかりやすい発表の方法」「レポートの書き方」「調べる力」などの技能を得たと答えている。そして5.5％の生徒が、「自分で計画をたて」「研究したことをまとめ」「自分の意見を持つ」のような思考力や判断力を得たと答えている。

この分析から「総合的な学習の時間」の実践により知識をはじめ、学問に対する関心や意欲、技能、思考力や判断力などが身につくことを期待できる。

（イ）「総合的な学習の時間」が各教科と違う点

「総合的な学習の時間」が各教科と違う点についてキーワードにまとめたものが第３表である。

第３表　「総合的な学習の時間」が各教科と違う点

キーワード	数（%）
自分で学習する	104（38.2）
（例）自分から進んで何かを知ろうとする。 先生に教えられるのではなく自ら学んでいく。 受け身の授業ではない。全て自分で調べる。	
興味のあることを勉強できる	84（30.9）
（例）興味を持ったものに取り組める。 本当に興味のあるものを調べているから将来のことを考えるきっかけになる。将来役に立つ。	
知識・視野が広がる	8　(2.9)
（例）学ぶ範囲が限られていない。 人の発表を聞きいろいろな分野のことを学べる。 教科の枠にとらわれず広い視点で考えられる。	
やる気に左右される	7　(2.6)
（例）やる気のある人とない人との差が出る。 本人の積極性が直接あらわれる。面倒くさい。	
その他	7　(2.6)
無回答	62（22.8）
合計	272　(100)

各教科と違う点について、40％近い生徒が「自分で学習する」と答えていることは大変興味深い。次いで30.9％の生徒が「興味のあることを勉強できる」をあげているが、これに分類したものも、自ら学ぶという内容を含んでいるものがほとんどである。

そして、「各教科は与えられるものの方が多いが、『総合的な学習の時間』は、自分から人に調べたことを与えることができる」や「個人学習だけど、周りの人から影響やアドバイスをたくさん受けられる」などの記載に注目したい。これらは、発表などによって他者の研究を理解するとともに、自分の知識を他者に伝えられることを実感しているものであり、知の共有がはかられた姿といえるであろう。

これらの分析から「総合的な学習の時間」は、多くの生徒に自ら学ぶ学習だと認識されていることがわかる。そして、「総合的な学習の時間」の実践により、自己学習力の育成を図るとともに、その経験を各教科の学習場面で活用できるようになると考えられる。

反面、自ら学ぶ学習であるだけに生徒のやる気や学び方により研究の進度や成果に大きな開きが出てしまう。これは「総合的な学習の時間」の大きな課題である。

（２）「総合的な学習の時間」を充実させる方法

ここで「総合的な学習の時間」を充実させるための方法をまとめる。まず、導入段階でオリエンテーションを充実させることが重要である。また発表を実施したり、提出物を課したりして、今やるべきことを明確にして計画的に学習の進行を図ることが大切である。そして、教員は生徒に対して積極的に指導することを忘れてはならない。自主的な活動であっても、生徒は「一人ひとり細かくアドバイスをしてほしい」などと感じている。各生徒の学習の進捗状況を把握して、適宜声をかけ、適切な指導をすることが必要であろう。

それと同時に、生徒間の学びあいを生かすことが重要である。高等学校は学校によって生徒の様子や学習の状況は多様であるが、どの学校においても生徒相互の影響力はかなり大きい。他の生徒が興味深い学習をしていることを知って意欲が高まったり、向上心がめばえたりすることは、充分に期待できることである。

おわりに

「総合的な学習の時間」の実践は、それぞれの学校の実態に応じて学習計画をたて、教員が適切な助言や指導をすることで、生徒に自ら学ぶことの喜びを感じさせるとともに、生徒が身につけてきた様々な知識や技能が実際に使えるものとなって総合化され、生徒の中に定着させることができると考えられる。

引用文献

教育課程研究センター 2004 「評価基準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（高等学校）－評価基準、評価方法等の研究開発（報告）－」
文部省 1999 『高等学校学習指導要領解説総則編』

参考文献

阿部侃壽 2004 「生きる力をはぐくむ課題研究（『月刊高校教育』５月号） 学事出版　pp.47-51
谷田部玲生 2001 「各教科の学習と総合的な学習の時間の関連」、工藤文三 「総合的な学習の時間の実施による効果」（工藤文三編『高等学校「総合的な学習」の運営と実践事例』） 学事出版